

〔論 説〕

古典はおもしろい？

——コウルリッジの『文学的自叙伝』を今読む意味、
およびその執筆過程に関する一考察

山 田 崇 人

はじめに

2013年5月、筆者の所属する東京コウルリッジ研究会は、サミュエル・テイラー・コウルリッジ著『文学的自叙伝 (*Biographia Literaria*)』の翻訳を出版した。翻訳に取りかかったのは1999年4月のことだったから、実に14年の歳月を費やしたことになる。これほどまでに時間がかかったのは、あまりに豊かすぎる内容の難しさに加え、彼独特の、一つ一つの文が非常に長いにも拘わらず極めて論理的で、また時には非常に詩的な美しい比喩に彩られてもいる文体を、もとの雰囲気もある程度伝えながら読みやすくわかりやすい日本語に置き換えようとした試みが、非常に困難なものだったからである。その試みがどこまで成功したかは定かではないが、それほどまでに苦労をした翻訳を一体だれに読んでもらおうというのかと問われたとき、我々はどう答えるべきであろうか。ロマン主義文学や文芸批評に興味を持つほどの人々なら、この作品を読むことを躊躇はしないであろうが、そういう人の多くは、このような作品の翻訳にありがちなことであるが、原文を読んだほうがわかりやすいと言うかもしれない。原文を読むのは少し心もとないという、イギリス文学などには日頃あまり親しんでいない人ならば、翻訳の存在をありがたく思うかもしれないが、そういう人々にとって果たしてこの書の内容はどれほどの意味を持つものでしょうか。『文学的自叙伝』に対する最も熱烈な賛辞としてよく引き合いに出されるのは、George Saintsburyが*History of Criticism* (1902-4) で述べ

古典はおもしろい？

た、文学の教授職などというものはすべて廃し、それによって浮いたお金で、大学入学者全員に『文学的自叙伝』を1冊ずつ無償で提供したほうがよいというものであるが、それは100年以上も前の話である。現在の大学生は興味を持って読んでくれるだろうか。

現在の状況

大学の英語教育において文学作品が敬遠されるようになって久しい。しかしかつては教養英語であっても、英文学や米文学を専門にしている教員が英米小説などを用いて教えたものだった。その授業に慣れ親しみ、自らも英米文学や英語学を専門とする、筆者も含めた教員たちは、現在主流になっている最新の英語教授法を身につけた教員たちに混じって慣れない英語教育法に悪戦苦闘する毎日である。その様子は例えばこんなところにもうかがわれる。日本の英米文学・英語学研究のための最大の学会である日本英文学会において、従来の英文学部門、米文学部門、英語学部門に加え、英語教育部門が数年前に設置されたこと自体が時代の流れを感じさせる。そして今年の秋の関東支部大会での英語教育部門のワークショップのテーマは「英語教育における〈文学教材〉の意義と実践」である。さらにはこの大会のメインシンポジウムのテーマは「古典の困難——それでも、やっぱり、教えたい？」である。あるいは、この英文学会関東支部のイベントとして、レイモンド・ウィリアムズ研究会のワークショップが開かれるが、そこでのテーマは、文学作品を今いかに読むべきか、すなわち現在の社会において人文学や文学研究が果たすべき役割は何か、現在の政治や社会に文学作品をどう結びつけて読むかということである。このように文学を誰にどう読んでもらうのかということが文学を研究している者にとって非常に頭を悩ますべき問題となっている。

現在我々にとって最も気になる問題といえは何だろうか。あらゆる分野でグローバル化が叫ばれる今、諸外国との関係が非常に気になることは間違いない。世界のあちこち、例えば今ならシリアでこの瞬間も紛争による激しい戦闘が行われていたりすることは、さまざまな情報が瞬時に伝わる現在、遠い他国のことであっても、とても無視できないことである。しかしさらに多くの人が切実に感じているであろうことは、国境など関係のないまさにグローバルな問題であり、連日の異常気象からも実感される環境問題かもしれない。折しも国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）

が6年ぶりに報告書を提示し、世界各地で相次いでいる干ばつや猛暑、豪雨、竜巻などは温暖化がもたらす異変で、工業生産や暖房需要などの人間活動が気候変動を引き起こした確率を95%以上とした。

ロマン主義の文学を環境問題の観点から読むことで学生の関心を引き起こすことができることを実例をもって紹介し、ロマン主義文学のエコクリティシズムの有効性を示した、ジョナサン・ベイト著『ロマン主義とエコロジー (Romantic Ecology)』が出版されたのは1990年のことだった(翻訳は2000年に出版されている)。ベイトは、彼が執筆を始めた日のトップニュースを引用することで、極めて印象的な書き出しでこの書を著している。そのニュースとは最初の2つは政治および経済に関するもの、そして3つめが地球温暖化に関する科学的報告、これらの一見あまり相互に関係のないように思えるニュースが、ワーズワスの詩を介して結びついてくるのである。それに少し做ってみるなら、筆者がこの文章を書いている2013年9月上旬に最もメディアを賑わしていたのは2020年オリンピック開催都市決定のニュースだった。一方深刻なニュースとしてはシリアの紛争があった。そしてもう一つ、印象に残っているのは、現在のスマートフォンの普及の立役者であるiPhoneの新機種が発表され、日本の三大携帯キャリアから揃って発売されることが決まったというものである。これら一見無関係に思えるニュースが、ロマン主義、特にそのキーコンセプトである想像力をキーワードにするとつながってくるように思われるのである。

冒頭に挙げたコウルリッジの『文学的自叙伝』がロマン主義の想像力を定義づけていることはよく知られている。ただしそこではその定義を導き出す議論は途中で打ち切れ、非常に示唆的な定義のみが書かれている。それは次のようなものである。

さて^{イマジネーション}《想像力》について、私はそれを^{プライマリー}第一あるいは^{セカンダリー}第二のいずれかとして考えます。第一の《想像力》はあらゆる人間の知覚の生きた力であり主要な行為者であって、それは無限の「^{アイ・アム}我在り」における永遠の創造行為を、有限な心のうちで反復するものであると私は考えています。第二の想像力は第一の想像力の^{エコー}反響であり、意識的な意志と共存しますが、その行為の種類においては第一の想像力と同一であって、ただ^{程度}程度とその^{様式}働きの様式においてのみ異なっているのです。それは再創造するために、溶解させ、拡散させ、消散させます。あるいはこ

古典はおもしろい？

の過程が不可能な場合でも、なお常に理想化し、統一しようと努めます。すべての客体が（客体としては）本質的に固定され死んだものであるのに対し、第二の想像力は本質的に生きたものなのです。

これを正確に解釈するのは非常に難しいが、いくぶん俗っぽく言うならば、第一の想像力は、我々が外界を認識するときに働く力であり、五感によって外部から取り入れた刺激の混沌とした集合体を、何か意味のある理解可能な世界として認識する力と言える。

さて、上述のニュースに戻るが、オリンピックの開催地を東京が勝ち得たのは、日本の招致委員会のプレゼンテーション力のおかげだったと多くの人が認めている。オリンピック招致レースにおいては、途中経過でどれほど有利であっても、最終プレゼンテーションで覆ることもあるという。言葉の持つ力の大きさが思い知られる。日本のプレゼンテーションで、高く評価されたものの一つは、二番目に語った佐藤真海氏の個人的な体験談を交えたもので、非常に感情に訴える感動的なものだったという。このように個人的な体験に普遍的な意味を見だし、感情に強く訴えて共感を得るというのはまさにロマン主義的なものと言える。ワーズワスがコウルリッジと共同で出版した『叙情民謡集 (*Lyrical Ballads*)』第2版の序文で、「詩とは力強い感情が自然に溢れ出したものである。それは穏やかな回想のうちによみがえる感情から生まれる (“poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquility”）」と述べたことが思い出される。さらにワーズワスは詩人とは何かという問いを発し、詩人とは「人びとに語りかける人 (“a man speaking to men”）」であると述べたことも思い出される。この『叙情民謡集』の序文のなかに、後々までコウルリッジにとって引っかかる場所があり、そこから『文学的自叙伝』が生まれることになるのである。そしてワーズワスとは違う独自の詩論（しかしそれはワーズワスの詩を分析することから生まれた詩論であるが）を展開していくことになるが、そのなかでワーズワスに倣って、詩とは何かというのは詩人とは何かというのと同じ問いであるとして詩人論を展開し、ワーズワスを想像力の詩人として高く評価するのである。溢れ出る力強い感情を言葉にして人びとに語りかけ、想像力を喚起して感動を生み出す力は、いつの時代でも大きな効力を持つものである。

ロマン主義批評の変遷と想像力の復権の可能性

ロマン主義批評は時代とともに移り変わりをを見せてきたが、その一つの流れを前述の『ロマン派のエコロジー』の中でジョナサン・ベイトが簡潔に述べている。それによると、本来ロマン派とは、一方ではフランス革命という非常に大きな歴史的出来事に共感する極めて政治的な側面を持つものであり、また他方では自然の大切さをそれまでのだれよりも強く認識し、その美しさを高らかに歌い上げるという面を持つものだった。その後者の見方に沿って、ワーズワスを自然詩人と見なす考え方が、ヴィクトリア朝においてはラスキンを始めとする人びとの間の、そして20世紀になってからも多くの一般読者の支配的な解釈だった。それに対し、ロマン派とドイツ観念論哲学との関わりに注目し、ロマン派は自然を歌ったのではなく、精神の世界のほうに目を向けたのであり、ロマン派が重視した想像力とは自然を超越する能力であると説いたのが、1960年代のハロルド・ブルームやジェフリー・ハートマンらであった。その見方は少なくとも学者たちの間ではそれ以降支配的なものとなっていった。それに異を唱えて登場するのが、ジェローム・マガンの『ロマン派のイデオロギー』に代表される見方で、それは現実を超越するロマン主義解釈に、再び政治的、歴史的視点を取り戻そうとする動きだった。それが1980年代アメリカにおいて支配的だったロマン派解釈である。これは、それまで支配的だった超越論的ロマン派解釈を崩し、政治や歴史を取り戻したという点で、ジョナサン・ベイトはある程度評価するが、それが取り戻そうとした政治的視点というものが、旧態依然とした右派と左派の対立という点で、もはや東西冷戦も終わった時代においては、あまり現実味のない批評であると考えている。確かに1789年のフランス革命に共鳴したワーズワスが、その後の恐怖政治に対する絶望を経験したあと、ロベスピエールの処刑によって恐怖政治が終わったことについて「再び巡り来る春の若枝と希望の花」を見出したことは、20年後の1989年のベルリンの壁崩壊に象徴される東西冷戦の終結に対し、プラハの春を経験したチェコスロバキアの人々が抱いた気持ちに通じるところがある。しかし現代の我々が現実問題として強く意識すべきことは、地球温暖化のような大規模な環境変化が、この「プラハの春」という力強い比喩表現の意味を変えてしまいかねない状況だとベイトは主張する。マガンらは、ハートマンやブルームの超越論的、想像力至上主義的ロマン派解

古典はおもしろい？

釈を退けたが、そのハートマンらが退けた、自然への回帰を目指すロマン主義という見方に、今こそ帰るときであり、それこそが現在における最も有意義なロマン主義解釈だという考えである。幸いプラハの春という比喻表現は、まだ力を失うことはなく、現在はアラブの春という表現に引き継がれている。しかし環境問題がますます深刻になっていることは否定しようがないことは確かである。先ほど紹介した、ベイトが『ロマン派のエコロジー』を書き始めた日のトップニュースの3番目、地球温暖化に関する科学的報告というのは、実はIPCCによる第1次評価報告書のことである。そして筆者がこの文章を書いている現在、その第5次評価報告書が発表されたというわけである。

ところで、アラブの春を引き起こしたいくつかの国における民衆のデモ活動を支えていたのは、FacebookやTwitterといった情報ネットワークだった。ここに先程述べたiPhoneの新機種発表のニュースが結びついてくる。スマートフォンのような情報端末は、コミュニケーションの形を大きく変えている。それは一方では、独裁国家のような体制のなかではとても不可能と思えた大規模な民衆運動を可能にしたり、あるいは大規模災害時の極めて有効な情報伝達ツールとなるようなプラスの面を持っているが、他方ではメールやインスタントメッセージのような、顔が見えない文字のみによるコミュニケーションが、思いがけない誤解を招いてしまうようなマイナス面もある。顔を合わせて、実際に声を聞きながら話しているときには何でもない表現が、文字のみになると全く違う印象を与え、些細なことからけんかとなって、ついには殺人事件にまで発展してしまうという悲劇まで引き起こされている。あるいは、情報端末を使ってちょっとした冗談として仲間内のみのもつもりで発信したことが、全世界に広がって、とんでもない騒ぎを引き起こしたりもしている。こういったことが起こるのは、ある意味で想像力不足のためと言えそうである。ここでいう想像力とは、ブルームやハートマンの考える現実を超越する能力ではなく、先に引用したコウルリッジの定義する、現実世界を認識する能力のことである。現在人々は、瞬時にして遥か彼方からの情報を得ることができ、また自らの発信する情報も瞬時に遥か彼方へと伝達されるような世界に生きている。このように知覚の届く範囲を遥かに超えた世界の情報をまさに指先で操作することができる、information at our fingertipsの時代なのである。ウィリアム・ブレイクの言葉、「手のひらに無限をつかめ（“Hold Infinity in the

palm of your hand”）」(「無垢の予兆 (Auguries of Innocence)」)を思い出してもよいかもしれない。このような、五感の届く範囲を完全に超えた世界をも把握する能力が想像力である。その働きが十分でないときに、さまざまな問題が生じてしまうと言えるかもしれない。

ところで、2020年のオリンピック開催都市の決定において、決選投票を争ったのはイスタンブールと東京だったが、それぞれの都市の問題点とされたものは、イスタンブールにおいては隣国シリアの紛争という政治的な問題であり、東京においては福島原発事故の影響という環境問題だった。しかし国際オリンピック委員会の人々の心を最も動かしたのは、既に述べたように招致委員会の代表たちの、時には非常に個人的なエピソードも交えた感情に強く訴えかけるプレゼンテーションだった。このことから、ロマン主義の、個人的な感情や想像力を重視する一面に注目することは、やはり無意味なことではないと言うのはちょっとこじつけであろうか。しかし、日本のオリンピック招致委員会の代表たちが英語とフランス語を駆使してプレゼンテーションを行ったような、まさにグローバル時代といえる現代において、あちこちの国で起こっているさまざまな問題を、相互に何らかの関係のあるものとして捉え、自分にもどのように影響してくるものかを考えたり、あるいはそういう国境などを簡単に超えてしまう地球規模の環境問題を認識したり、またあるいはそのような認識を可能にしている情報技術の発達をもたらしたコミュニケーションの形態の大きな変化によって、もっと身近な人間関係のあり方まで変わってしまった状況において現実をどう認識するのかといった場合にも必要なのは想像力の働きではないだろうか。

ベイトが『ロマン派のエコロジー』でロマン主義批評の変遷の概要を述べたとき、その批評の対象となっていたのはワーズワスだった。ワーズワスこそは自然詩人であり、政治的転向を遂げたとして批判された代表であり、そしてコウルリッジに言わせればシェイクスピア、ミルトンと並ぶ想像力の詩人であった。そのワーズワスの詩における想像力の働きを理論的に証明しようとし、想像力の定義を行ったコウルリッジの『文学的自叙伝』を、現在において読む意義はそこにあると思われる。もちろん、これを読んで想像力というものが哲学的にどのような意味を持つものかを理解したからといって、我々の現実認識が突然劇的に変わり、人々の間のさまざまな誤解がなくなって多くの問題が解決するというわけではない。が、自分

古典はおもしろい？

とは何か、人間とはどういうものであるかということのを少しでも考えてみる機会を得て、自分自身を省み、「汝自身を知れ (Know thyself)」という格言を実践することは無意味なことではないだろう。

『文学的自叙伝』の概要

さて次に、『文学的自叙伝』とはどういう作品で、どのように読んでみるとおもしろいかということを考えてみたいと思う。まず、このあまりにもとらえどころのないように思える作品が、どのような構造を持っているのかを少しでもわかりやすくするために、執筆の状況や過程をまとめておきたい。執筆の課程については、翻訳の巻末に載せた解説の中で書いたが、紙面の関係であまり詳しくは書けず、割愛してしまったことも多い。その中の興味深いものをいくつか記しておきたい。

『文学的自叙伝』は、著者自身が「まとまりのない雑録集 (“so immethodical a miscellany”）」と呼んだように、一見雑多な内容がとりとめもなく語られているように見える上、「哲学の章」と呼ばれる部分の形而上学的内容の難解さもあり、出版当初から酷評され、真価が理解されるまでには非常に時間がかかった。20世紀に入ってジョン・ショークロスによる詳註付きの版が出版されてからも、その副題 *Biographical Sketches of my Literary Life and Opinions* が、ローレンス・スターンの奇書『トリストラム・シャンディ (*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*)』を連想させることもあって、脱線が多く構成にまとまりがないように見えることに対する批判は少なくなかった。しかし彼の手紙やノートブックなどが出版されて、執筆の状況が明らかになってくるにつれ、その見方も変わってくる。そして1953年にはGeorge Whalleyによって、『文学的自叙伝』は短期間に一気に思いつきで書かれたようなものではなく、長年の間コウルリッジの心にあって熟考されたものであることが示され、さらにその中心には常にワーズワスの存在があったことが明らかにされた⁽¹⁾。その結果、この作品は決してまとまりのない雑録集などではなく、何らかの目的をもって熟慮の上書かれているものであると認められるようになり、関心は内容や構成に統一があるかどうかではなく、どのように統一性を見いだすことができるかというほうに移っていく⁽²⁾。

さらに1977年にはD. M. Fogelが『文学的自叙伝』執筆に関係する言及のある手紙やノートブックのすべてを集めて整理し、各章がどのような順

を追って書かれたのかを明らかにしている⁽³⁾。そして1章から4章までの伝記的部分と、14章から22章までのワーズワス批評が最初に書かれたものであり、その後5章から13章までのいわゆる哲学の章が書かれて、途中に入れられることになったということがわかってきた。原稿や校正刷りなどはすべて失われてしまっているので、それ以外の手に入る限りの証拠を精査した上で、そこから論理的に帰結されることを客観的に述べたFogelの説は、現時点ではもっとも正しいように思われるものである。しかしそれで議論が終わりにならないところが文学研究のおもしろいところと言える。

キャサリン・コウバーン監修の『コウルリッジ全集 (Collected Coleridge)』に収められた*Biographia Literaria*を編纂したJames EngelとWalter Jackson Bateは、その序文のなかでこの作品の書かれた状況を説明するにあたり、当時コウルリッジがおかれていた状況や心理といった情況証拠も取り入れて推測しているが、結論としてはFogelの線に沿っている。しかしコウルリッジの性格や人となりなどを考慮に入れて判断した結果、その意見に異を唱える人もいるのである。EngelとBateの考えでは、5～13章の哲学の章は1ヶ月余りで書いたものであり、特に12章の後半から13章にかけては最後の3日間で書いたということになるのであるが、Norman FrumanやNigel Leaskは、哲学の章はもっと以前に十分に時間をかけて書かれていたものと考えている。EngelとBateは、12章の原注にある日付から進捗を判断しているが、原注はあとで付けられた可能性もなくはない。また13章の想像力に関する議論が途中で中断され、友人からの手紙が挿入されることになるが、この手紙が実はコウルリッジ自身が書いたもので、それを非常なスピードで書いたことを友人への手紙のなかで「ペンをインクに浸す以外には紙から離すことなく (“without taking my pen off the paper except to dip it in the inkstand”)」書いたと述べていることも証拠として挙げているが、手紙以外の部分も大急ぎで書いたかどうかまではわからない。一方Frumanは、コウルリッジの書記を務めていたジョン・モーガンが印刷業者に進捗状況を知らせた手紙の内容に疑問を持ち、完成していた分量に対するモーガンの見積もりが間違っていたのではないかと推測しているが、これも確たる証拠があるわけではない。結局のところ、同じ証拠に基づいて判断しているのにこのような意見の違いが出てくるのは、Raimonda Modianoが指摘するように、『文学的自叙伝』

古典はおもしろい？

を評価するにあたって常につきまとう問題点である、ドイツ哲学からの剽窃の問題が絡んでいるのかもしれない⁽⁴⁾。すなわち、コウルリッジの信奉者たちは、もちろん剽窃を許すわけではないものの、執筆時の健康状態や経済的な困窮状態、そして締め切りを大幅に過ぎてしまっているという状況から、彼の行為を同情的に見て理解しようとするが、Frumanは剽窃はむしろコウルリッジの性格的な欠点に由来するものと見るのである。

『文学的自叙伝』が実際のところどのように書かれたかということ、できるだけ客観的な証拠に基づいて論じてみても、その議論を追うのは、よほど興味があるならともかく、普通はやや退屈でありおもしろくもないものであろう。むしろコウルリッジがどういう人間であったのかというところを推測し、それをどう考えるかということが、解釈を大きく変えていくことを見るほうがおもしろいとも思える。たとえばFrumanは、『文学的自叙伝』の出だしの文章に注目し、コウルリッジが自分は今まで大したものも出版していないし、長年の間文学や政治の世界からは離れて暮らしてきたのに、このところ頻繁に自分の名前が人々の口に上るのは不思議だと書いていることについて、実際はコウルリッジは講演や定期刊行物の発行や劇の上演など相当活躍していたのであるから、それは事実と反することを指摘している⁽⁵⁾。また他にもコウルリッジが自分自身について述べているコメントには、文字通りには受け取れないものも多いことを述べている。このようなところからもコウルリッジの人間性がうかがわれるのである。しかし『文学的自叙伝』の出だしの文章に関して言うならば、これは一種のレトリックとも考えられる。つまり、自分の名前が頻繁に言及されるのは、結局のところワーズワスとサウジーの友人であるからで、しかもそのためにワーズワスが『叙情民謡集』の序文で述べていることが、自分の意見であるかのように見なされているということを強調したいがために、自分の無名度を必要以上に大げさに述べているとも言えそうである。さらには、自分の書いたものが量においても重要度においても大したことではないというのは、ワーズワスやサウジーに比べればという気持ちを読み取ることもできるかもしれない。たとえば第3章で、やはり自分の出版物が数も少なく重要でもないと述べているところがあるが、それはサウジーとワーズワスについて述べているところである。この点についてはさらに別の解釈もできるが、それはこのあと述べる。このように、ちょっとした記述から作者の内面やさまざまなことを読み取ろうとするような読み方が

できるところが、この自伝的性格を持った作品がさまざまな人の興味を呼び起こしうる所以と言える。

そういうわけで、Richard Holmesによるコウルリッジの伝記は、膨大な資料に基づきながら、コウルリッジの人生に起こったさまざまな出来事を描くとともに、その時々のコウルリッジの心理を想像して描き、コウルリッジが今まさに生きて活動しているのを見ているかのような印象を与えてくれるものとなっているので、多くの読者を獲得しうるものと言える。『文学的自叙伝』執筆に関しても、それに関係する記述を手紙やノートブックに書いたときのコウルリッジの心境を推測し、そこからこの作品を解釈しようとしている。客観的な分析という点ではよくないことかもしれないが、ロマン主義の解釈にはふさわしい手法とも言え、より真実に迫れるように思えなくもないのである。

手紙に関する一考察

というわけで、以下にコウルリッジが『文学的自叙伝』に関することを述べている手紙をいくつか取り上げ、気になる点を述べてみたい。

バイロン及びロングマンへの手紙

1815年3月30日付のバイロンへの手紙で、コウルリッジは現在計画している詩集を出版してくれるロンドンの出版社を紹介してくれるように頼んでいる。その手紙のなかで、その詩集には詩の批評に関する序文を付けたいということを述べているが、その序文が半年後には『文学的自叙伝』となるのである。そしてその手紙のなかには、『文学的自叙伝』第1章に述べられていること、すなわち自分には大した著書もないのに、ワーズワスとサウジーの友人だというだけで、いわれのない批判を浴びているということが述べられている。そして、かつてバイロンにも自分の詩の大げさな表現や不明瞭さを批判されたことを受けて、その欠点は自分でも承知していて、自らそれを皮肉ったソネットをネヘミア・ヒギンボトム（注）の偽名で雑誌に投稿したということも述べている。さらには第3章に「私の文学仲間が批判の滝の下にいるときには必ず、私もその飛沫を浴びてびしょ濡れにならなければならない（“my literary friends are never under the waterfall of criticism, but I must be wet through with the spray”）」という文があるが、それとかなり近い文と言えるもの（“The cataracts of

古典はおもしろい？

anonymous criticism never fell on them, but I was wet thro' with the Spray”)まで、このパイロンへの手紙には出てくるのである。そして注目すべきは、これらのことが述べられたのは、これが最初ではないことである。6年前の1809年4月27日付のトマス・ロングマンへの手紙でもネヘミア・ヒギンボトムの偽名で書いたソネットのことが述べられているし、自分の詩が凝った大げさな表現に対し一応正当な批判を受けたあと、特に何も作品を発表していないのにワーズワスとサウジーの知り合いであるというだけでいわれのない批判を受けているということがやはり述べられているのである。ということから『文学的自叙伝』の出だしに述べられた不満、すなわち自分の著作は数も少なく重要でもないし、文学や政治の世界からは退いて暮らしてきたのに、このところなぜ自分の名前がこんなにも話題になるのか理解に苦しむという気持ちは、かなり前からコウルリッジの心にわだかまっていたことだと言える。しかも、このことが『文学的自叙伝』の執筆を始めたときではなく、その数年前の経験を意識しながら書いていたとすれば、執筆時にはコウルリッジは相当名声を博していたという事実と食い違うという疑問がある程度解消されるように思えるのである。

ブラバントへの手紙

1814年12月にカーンに移り住んだコウルリッジは、医師R. H. ブラバントと知り合い、頻繁に手紙をやり取りするようになる。1815年7月29日付けのブラバントへの手紙で、『文学的自叙伝』（まだこの段階では詩集への序文として書いていたものだったが）のmetaphysical partは君に読んでもらうために書いたと言っていることから、コウルリッジが読者を強く意識していることがわかる。13章で、賢明な友人からの手紙を装って、その忠告に従い想像力論を展開するのを途中でやめるが、このようなことを思いついたのはブラバントがそのような友人の役割を果たしていたからかもしれない。そして、ワーズワスが、自分が彼の理論を論破したことで不愉快に思うかもしれないということを、この手紙に書いていることからすると、ブラバントには自分のことを相当詳しく話していたのであろう。知り合って半年あまりで、自分とワーズワスの関係という、コウルリッジの人生におけるあまりにも大きな出来事を語っていたとすれば、そのことは『文学的自叙伝』執筆にかなりの影響を及ぼしたと思われる。

そしてまた、コウルリッジは『文学的自叙伝』の読者として、ワーズワ

スを究極的には想定していたであろうと思われる。興味深いことにブラバントへの手紙のなかにスケートの比喩が出てくる。この手紙の本当の目的はブラバントに頼み事をする事だったのだが、その前に自分が書き上げたものの内容を説明するのに夢中になってたくさん書き過ぎてしまったために、「スケーターのようにかかとでストップをかけなければ（“if I do not, like a Skaiter, strike a Stop with my Heel”）」紙面が尽きてしまうと述べているが、突然ここでこのような比喩が出てきたことも、ワーズワスを強く意識していたからではないかと思われる。ワーズワスの代表作『序曲』の第1巻のスケートのエピソードに「そんなとき、かかとに重心をかけて、とっさにちょっと止まったものだった（“then at once / Have I, reclining back upon my heels, / Stopped short”）（485-7行）」という表現が出てくる。コウルリッジはこの詩を思い出していたのかもしれない。『序曲』のスケートのシーンは、ドイツ滞在中にコウルリッジがワーズワスに送った手紙のなかにスケートの描写に刺激されて書かれたものだった。このあたりの事情は山田豊氏の著書に詳しい⁽⁶⁾。『序曲』はもともとコウルリッジに宛てた詩として書かれたものであり、ワーズワスの生前に出版されることはなかったものの、このスケートのシーンについては“*Influence of Natural Objects*”のタイトルでワーズワスの1815年版詩集に掲載され、その詩集をコウルリッジは『文学的自叙伝』を執筆する直前に受け取っていたのである。

ブラバントへの手紙は、これまで、この段階でコウルリッジがどれくらい『文学的自叙伝』を書き上げていたかを知る証拠としてばかり注目されてきたが、コウルリッジがどれくらい個人的なことを語っていたかということに注目してもよいかもしれない。このような分析は多分に推測に過ぎず、客観的なものとは言えないかもしれないが、そういう心理面に注目するのもおもしろいと思われる。コウルリッジは『文学的自叙伝』のようなものを、モーガンへの口述筆記という方法を取ったために書くことが可能だったということ、EngelとBateは全集版『文学的自叙伝』の序文で述べているが⁽⁷⁾、同様に、新しく得た友人たちにワーズワスとのことを語ったことで、幾分客観的に自分を見つめることができるようになって、ワーズワスは不快に思うかもしれないと思いつつもこの文章を書き得たとも言えるかもしれない。

古典はおもしろい？

モーガンからフッドへの手紙

コウルリッジの書記を務め、『文学的自叙伝』を口述筆記したジョン・モーガンは、1815年8月10日から17日にかけて3通の手紙を、印刷業者のウィリアム・フッドに送っている。まず8月10日付けの手紙では、『文学的自叙伝』の原稿の一部を送るとともに、残りもほぼ完成しているが、形而上学的な部分5、6枚を書き直す必要があり、それはあと数日でできるだろうと伝えている。実は本来の原稿の締め切りは6月初めだったので、2ヶ月ほども過ぎていたことになる。次の8月14日付けの手紙はフッドからの返信に応えたもので、木曜日（17日）にAshtonまで行くが、その頃には残りの原稿も届いているだろうと書いている。そして本当ならブリストルのフッドのもとを訪れたいところが時間がなくて果たせないということや、Ashtonに行く理由は従姉妹の結婚式に出るためだというような個人的なことまで書いているのである。さらに、原稿がもし木曜までにできあがらないとしても、あとそれほどはかからないはずだから、印刷を進めてほしいと述べ、自分は詩人でも夢想家でもないことは確かだ、と強調している。最後の17日付けの手紙では、バースまで来てみると、従姉妹の家族がそこに集まっていたので、Ashtonまで行く必要はなくなったため、フッドには会えないと述べ、さらに原稿については、特に進展はないが、数日後には送れるだろうと、また繰り返している。そして、最初の手紙から述べていた、コウルリッジの肖像画を版画にして掲載してみてもどうかという提案について、だれにどのように製作を頼むかというような具体的な話までしている。これらの、原稿の完成が近いことを何度も強調したり、それとは直接関係のない話も入れたり、掲載する肖像画のことまで述べて、もう完成が視野に入っているかのような印象まで与えようとして、極めて多弁になっていて幾分コミカルにも思える手紙は、逆にまだ原稿が完成しそうなものではないかと思わせるのである。そして実際に完成原稿がフッドのもとに届けられるまでにはさらに1ヶ月以上かかるのである。そうすると、EngelとBateが考えるように、7月末の時点ではまだ哲学の章はほとんど完成していなかったというのが真実ではないかと思えてくる。

以上見てきた手紙は、『文学的自叙伝』の創作課程に関する情報が多く含まれているものである。この作品がどのような順序で書かれたかということを、これらの手紙から客観的事実と思われるものを抜き出して論じて

みても、その議論自体はさほどおもしろくもない話となってしまうかもしれないことは既に述べたところである。とはいえ、その結論によって内容理解が深まったり、それまでは気がつかなかったことがわかってきたりするならば、そういった研究も十分に意味のあるものとなることは確かである。そしてそういう研究をさらに意義あるものにするためには、今見てきたようにこれらの資料のもっと些細なところにも注目するのがよいように思われる。そしてもちろん『文学的自叙伝』の文章自体を細かく読み解くことが必要なのは言うまでもない。

もともと詩集の序文として、1つのまとまった文章として書いていたものを、最終的にそれ自体で独立した作品とするにあたり、コウルリッジはそれを章に分けることにする。そのことをフッドに伝えたのは、完成原稿を送る2日前の手紙（1815年9月17日付け）であり、最初の3章に相当する分の原稿は既に送ってしまっていた。なぜそのような執筆の最終段階になって、まるで最初から章立てで書いていたかのように、きれいに章に分けることができたのか、あるいは実際に各章の出だしや結びは自然な感じになり得ているかどうか、そしてもしかしたらこの作品は、コウルリッジの言う「まとまりのない雑録集」などではなく、全体としてきちんとした構成を持っているのではないか、ということを確認するためにも、細部まできちんと読むことが必要である。このような大部の書においてはそれだけでも大変なことであるが、これはそれに値する作品であり、どこを開いて読んでみてもたちまち引き込まれる面白さに満ちていて、その努力は十分に報いられるのである。

まとまりのない雑録集という表現は第4章の終わりに出てくる。だとすれば、これはそこまで書いたときの印象だったのかもしれない。あるいは1～4章と14～22章までを書いたときの印象だったのか。いずれにせよ、あちこちに出てくる個々の表現を、完成品としての全体にあてはまるものと見なして判断するのは、ときには正しくないこともあるかもしれない。それらは書いている途中の段階で出てきた表現であることもあるだろうから。そしてこの作品は、コウルリッジが長年にわたって心に抱いていたことを吐き出したもので、それも強く心にわだかまっていたことを、そのときの状況を思い出しながら強い感情に突き動かされて書いたものである。従って、まさにワーズワスが詩について述べた言葉、”poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion

古典はおもしろい？

recollected in tranquility” が当てはまるように思われる。『文学的自叙伝』はまさに一種の詩のような創作物と言えそうで、そのように読むのがよいと思われる次第である。

結び

Norman Frumanは、『文学的自叙伝』が伝記として事実を語っているように見えながら、あちこちにちりばめられている逸話のなかには作り話がたくさんあることを指摘し、そのことは実はそういった逸話が作品全体の構造においてどのような役割を果たしているのかを考えることが重要だということを示してくれるものだとして述べている⁽⁸⁾。コウルリッジ自身がこの作品を「まとまりのない雑録集 (“so immethodical a miscellany”）」と呼んでいるからといって、*Essays on Method*の著者であり、詩人であるとともに優れた散文作家でもあるコウルリッジの作品にmethodがないなどと考えるとはんでもなく失礼なことだと言うのである。『文学的自叙伝』第1章の最初にもコウルリッジは、この書の目的について述べながら、「私が自伝的な語りを用いたのは、主として本書に一貫した連続性を持たせるためでした。本書は、部分的には、個々の特定の出来事から思いついた種々雑多な考察 (“miscellaneous reflections”）」を目的としています」と書いているように、読者はさまざまなエピソードやそれに対する考察を読みながら、この作品の全体像を構築していくことになる。しかしそれらのエピソードや著者の主張が、時には作り話であったり事実と反するようになってしまうことがあったりし、読者の心情によっても解釈が大きく変わってきたりするところが、この作品の難しさでもありおもしろさでもある。このことは、ある意味で現在の世の中の状況、つまり情報端末によってさまざまな情報が容易に得られるが、それらが必ずしも信頼できるものばかりではなく、しかも多くは情報のチャンクとでも言うべき不完全で断片的で誤解を生ずるようなものであって、そういう情報から自分の所属する世界とそのなかの自分の立ち位置を把握しなければならない状況にどこか通じるところがあるようにも思える。携帯メールなどでやり取りされる短い文章と、『文学的自叙伝』のような文章は対極的なもののように思えるが、どちらもできる限り誤解なく理解するには想像力の働きが必要だということとつながるのかもしれない。想像力とは「対立する、あるいは不調和な性質の、均衡ないしは調和 (“balance or reconciliation of opposite or

discordant qualities”) (『文学的自叙伝』第14章)」として現われる力であるから。著者の頭の中で長い年月を経て熟成された『文学的自叙伝』のような古典を読むことによって、想像力を育成することは無意味なことではないのである。

ワーズワスは『叙情民謡集』に付けた序文のなかで、詩とは力強い感情が自然に溢れ出してきたものだと言った。そして詩人とは人々に語りかける人であると。そのワーズワスについてコウルリッジは、彼は想像力によって、見慣れてしまったものに目新しさ (novelty) の魅力を与えることができる詩人であると述べている。2020年オリンピック開催地を決定づけたプレゼンテーションの一つが、人々の感情に強く働きかける巧みなジェスチャーと効果的な語りによって、「おもてなし」という言葉の印象を一瞬にして大きく変えてしまったことは記憶に新しい。まさに、何の変哲もない、聞き慣れてしまっていた言葉に、使い方一つで目新しさの魅力を与え、それを特別な言葉にしたのである。今年の流行語大賞の有力候補の一つになったことはおまけだが、この言葉を多くの日本人に再認識させ、その心におもてなしの精神をこれまで以上に強く呼び起こしたとすればすばらしいことである。ロマン主義的想像力、そしてワーズワスやコウルリッジが考えていたことは現在も健在である。

注

- (1) George Whalley, “The Integrity of *Biographia Literaria*”, *Essays & Studies*, new series, 6 (1953) pp. 87-101
- (2) John Spencer Hill, *A Coleridge Companion*, Macmillan, 1984, p. 224
- (3) D.M. Fogel, “A Compositional History of the *Biographia Literaria*”, *Studies in Bibliography*, 30 (1977), pp. 219-34
- (4) Raimonda Modiano, “Coleridge as Literary Critic: *Biographia Literaria* and *Essays on the Principles of Genial Criticism*”, in *The Oxford Handbook of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Frederick Burwick, Oxford University Press, 2009, p. 207
- (5) Norman Fruman, “Editing and Annotating the *Biographia Literaria*” in *Coleridge’s Biographia Literaria, Text and Meaning*, ed. Frederick Burwick, Ohio State University Press, 1989, p. 12
- (6) 山田豊著『ワーズワスとコウルリッジ：詩的対話十年の足跡』音羽書房鶴見書店, 2013, pp. 168-173
- (7) James Engel and W. Jackson Bate, eds., *Biographia Literaria*, 2vols.

古典はおもしろい？

(1983), vol. 1, p. xlv

(8) Fruman, p. 19